

室町時代のアクセント推定の方法 謡「松風」を例に

著者	坂本 清恵
雑誌名	無形文化遺産研究報告
号	10
ページ	65-74
発行年	2016-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003179/

室町時代のアクセント推定の方法 ―謡「松風」を例に―

坂 本 清 恵

一 はじめに

日本語アクセントは音の高低を利用するものであり、伝統音楽はことばのアクセントの高低を生かして作曲されることが多いことから、残されている譜によって作曲当時のアクセントを知ることができる。これまで、『四座講式』『補忘記』などの声明類や「平曲譜本」「義太夫節浄瑠璃譜本」など語り物の譜が、鎌倉時代から江戸時代までの京都や大坂のアクセント資料として使われてきた。

東京文化財研究所無形文化遺産部第十回公開学術講座「邦楽の旋律とアクセント―中世から近世へ―」において、室町時代の謡がどれくらいアクセントを反映していたかを考えるにあたり、金春禪竹『五音三曲集』に掲載されている「松風」の胡麻章を検討することになった。ここでは、金春禪竹と金春喜勝の胡麻章とアクセントとの比較とともに、「松風」の当該箇所アクセントの推定方法を紹介する。

アクセントを示すにあたり、高い拍をH、低い拍をL、下降する拍をF、上昇する拍をRとする。また胡麻章は《》内に、上げ胡麻をU、下げ胡麻をD、平胡麻をS、下降する胡麻をFで、胡麻章のない場合には×、その他は*で示す。

また、胡麻章については次の資料を比較対照した。

国文学研究資料館蔵 金春禪竹自筆本『五音三曲集』

「長祿四年十一月十一日 金春竹田秦翁 氏信（花押）」とある。

禪竹 一四〇五（応永一二）―一四七〇（文明二）

法政大学野上記念能楽研究所蔵 毛利家旧蔵金春喜勝筆謡本「松風」

書写年は不明。喜勝 一五一〇（永正七）―一五八三（天正一一）。

金春禪竹から数えて五世。

二 アクセントの推定方法

日本語のアクセントは、通時的にも変化し、地域的にも異なる。しかし、同じアクセントを持つ語は、同じように変化を起し、アクセント型の対応関係がみられる。文献資料と地域方言による研究から明らかになったアクセントによる単語のグループのことを、語類といい、品詞、拍数ごとに分類される。ここでは早稲田語類によって記述を行う（二）。

京都アクセントは次のように、平安・鎌倉時代には、語頭から二拍以上の低拍が続いていたものが、室町、江戸時代には高拍で始まる形に変化をする。これをアクセント体系変化と呼ぶが、低く始まる型、すなわち低起式のものが増減し、高く始まる型、すなわち高起式が増加する。室町時代の謡に反映するのは、アクセント体系変化後の京都アクセントであると考

えられる。

平安・鎌倉・室町・江戸

L L V H L

L L H V H L L

L L L V H H L

L L L H V H L L

L L L L V H H H L

L L H H · L L H L V H L L L

東京アクセントと京都アクセントの鎌倉時代、室町・江戸、現代のアクセントを語類によってその対応を示したものが稿末の表である。「東京出自」は現代の東京アクセントより古い東京のアクセントである。現在の東京でアクセントがその語類の例外になっているものに×を付けた。

三において、稿末の語類表を参考にしつつ、室町時代京都アクセントの推定と比較を行っていく。

「松風」の詞章のうち、声点、節博士、胡麻章などのアクセント注記例のある語については、秋永一枝他編『日本語アクセント史総合資料 索引篇』『同 研究篇』（東京堂出版 一九九七、九八）に拠り、基本的にはここでは考察の対象としないが、大きく語類のアクセントと外れる場合などについて是一部とりあげて説明する。なお、アクセントの典拠資料の略称は『索引篇』に従う。典拠資料がアクセント体系変化の前後どちらのアクセントを反映するものかについては、『研究篇』で確認されたい。

ここでアクセントの推定の対象となるのは、主に多拍の複合語である。それぞれの成素の語類が分かれば、同様の語構成を持つ語のアクセント注記から検討を行うことになる。アクセント変化前のアクセント推定には次の研究によるところが大きい。

秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 研究篇上下』一九八〇・一九九一年 校倉書房

また、胡麻章からアクセントを検討する場合には、三拍では、おおむね次のように推定を行う。

HHH《UUU》《DUU》《DSS》

HH L《UUD》《SSD》

HL L《UDD》《SDD》《UDU》《SDS》

LHL《DUD》《SUS》

右のうちゴチックで示したものは、胡麻章の高低とアクセントの高低が一致しないものであるが、次のように判断をする。

HHHと推定するものに、《DUU》《DSS》がある。謡い出しのHHHは語頭を下げて歌うので、一拍目の胡麻が低く振られることがある。また、《UDU》《SDS》のように二拍目が低くなつてまた上がる中低型の胡麻章は、その直前にアクセント核があるものとし、HL Lのアクセントを推定する⁽¹⁾。

三 「松風」におけるアクセント推定の具体例

「三一二」推定アクセントと胡麻章が一致するもの

胡麻章の影印は稿末にまとめて掲載したので、用例の番号と照合していただきたい。

1 「心つくしの《×DS×U》秋かせに《×××U》¹ 禅竹

2 「こころつくしの《SSSDSSS》秋かぜに《SSSDS》² 喜勝

「心づくし」は「心」が三拍名詞五類で、「尽くす」は三拍一類動詞と同様と考えられ、後部が動詞の場合には、動詞のアクセントを生かす傾向が

みられる^(三)。鎌倉時代にはLLLLHHLか、安定型のLLLLLHLLが推定でき、体系変化により、HHLLLLあるいはHHLLLLになったと推定される。禅竹の胡麻章は「心つくし」《×DS×》は「つ」で下がることを示す。喜勝の胡麻章「こ、ろつくし」《SSSDSSS》も「つ」に下げ胡麻が付され、ともにここで下降するHHLLLLのアクセントと一致する。語類と語構成から推定したうちのLLLLLHLLVHHLLLLの変化後のものと一致することになる。

「秋風」は、『近松』と現代京都アクセントがLLLLであるが、喜勝の胡麻章はこれとは異なり《SSSD》である。「秋風」は二拍名詞五類+二拍名詞一類の構成で、同様の構成にはアクセント体系変化前LLLLの例に「雨鳥（あまどり）」『和名 名義』、「唯米（ただよね）」『医心』、LLLLの例に「猿柿（さるかき）」『医心』、LLLLH「春風」『古今』がある。アクセント体系変化後は「春風」『平節』HHLLがあり、これはLLLLHからの順当な変化である。体系変化前にLLLLの例があり、HHLLへの変化も考えられ、喜勝の胡麻章は室町時代の京都アクセントを反映しているといえる。

3 「ゆきひらの中納言」《UUUDDUUU》 禅竹

4 「ゆきひらの中納言」《DUFUUF》 禅竹

5 「行平の中納言」《SSSDSSS》 喜勝

6 「行平の中納言」《SSSDSSS》 喜勝

「行平」は、四拍の名前で、一類動詞「行く」+「平」の構成である。

秋永によれば、アクセント体系変化前には、前部に二拍四類の「仲」LHである「仲平」がLLLLであるところから、「行く」が一類動詞で高起式であり、前部が高く始まる「行平」は四拍多数型のHHLLが推定されるという^(四)。現代京都では、「行平」HHLLであるが、HHLLからHH

LLへ、さらにHHLLと変化したものであろう。

禅竹の譜では、「行平の中納言」に3《UUUDDUUU》、4《DUFUUF》の例がある。前者は「の」が続くためにHが後ろへずれたが、HHLLを反映し、後者も謡い出しであるために低く始まるが、アクセントはHHLLを反映しているとみてよい。喜勝「行平の」の譜は二例とも《SSSD》でこれも禅竹3と同じでHHLLを反映する。

7 「浦半の」《DUD×》 禅竹

8 「浦半の」《SDSS》 喜勝

「浦曲」は、「浦」二拍名詞三類+「輪」一拍名詞三類の複合語である。アクセントの確例はない。同様の語構成のものでアクセント体系変化前LLLLの例が、「あやめ（文目）」『古今 僻抄』、「うねを（畝丘）」『神紀』、「おにび（鬼火）」『和名』、「くまの（熊野（地名）」『袖中』、「しもよ（霜夜）」『古今』、「すみご（炭簍）」『名義』、「たまる（玉井）」『袖中』、「つなで（綱手）」『和名 袖中』、「なはて（縄手・暇）」『和名 名義』、「やまだ（山田）」『人紀 古今』など圧倒的に多く、アクセント体系変化を経てHHLLとなったと推定できる。禅竹は《DUD》で、喜勝は《SDS》。禅竹はHHLLの語頭下がった例。喜勝は三類「浦」のHLを生かしたHHLLを反映するのであろう。HHLLもHHLLも室町時代のアクセントであった可能性はあろう。

9 「里はなれなる」《UUUDDUD》 禅竹

10 「里はなれなる」《SDSSSD》 喜勝

「里離れ」は、「里」二拍一類+「離れ」二類動詞の複合名詞である。同じ構成のアクセント体系変化前の例に「くびおほひ（首被・頸被）」『和名 名義』、「とこしほり（床縛）」『和名 名義』、「とりあはせ（闘鶏）」『和名 名義』、「まとまうし（的申）」『和名 名義』、「みやづくり（宮造）」『古今』

がHHHHLである。体系変化を経てもHHHHLであったと考えられ、
 禪竹の胡麻章《UUUD》がまさにこのHHHHLを反映している。

11 「かよひちの《UUUD*》」禪竹

12 「かよひちの《DSSSD》」喜勝

「通路」は、一類動詞「通」を前部に持ち、「古今」にHHHLの例、『近松』にHHLLの例があるが、禪竹の胡麻章《UUUD》からHHHLを推定した。喜勝の胡麻章も語頭が下がるが《DSSSD》でHHHLを反映している。

13 「つたなき《UUUU》」禪竹

14 「つたなき《SSSS》」喜勝

「つたなき」は『平節』に「拙ナふ」《上×××》とHHLLを示す譜があるが、禪竹の胡麻章は「つたなき」《UUUU》と上げ胡麻が、喜勝も《SSSS》であり、『名義』にあるHHHFを受け継いだHHHHであったのであろう。

15 「あま小船の《SSDUDS》」禪竹

16 「あま小船の《SSDSSD》」喜勝

「海人小舟」は、「海人」二拍名詞三類＋「小舟」の複合である。「小舟」にはHHH『和名』袖中』、HHL『袖中』の例があり、高起式の一類か二類の可能性がある。この語構成では「あさがしは(朝柏)」「古今」袖中』、「あしがなへ(足鼎)」「和名』名義』浄拾』、「かはごろも(皮衣・裘)」「和名』名義』字鏡』、「くそかづら(細子草(植物名))」「和名』「はなざかり(花盛)」「古今』浄拾』、「みみぐさり(耳鎖)」「和名』名義』「もとかしは(本柏)」「古今』「やまあざみ(山薊・大薊(植物名))」「和名』「やまかしは(猪

苓(植物名))」「医心』にLLLHLの例がみられ、これがアクセント体系変化を経て、HHLLLとなったと推定できる。禪竹の《SSDUD》、喜勝の《SSDSS》ともHHLLLを反映する。

17 「夢の世に《UU*DD》」禪竹

「夢の世」は二拍名詞三類「夢」はアクセント体系変化前にLLであり、アクセント体系変化を経てHLとなるが、「ゆめのよ」全体でLLLHからHHLLと変化したとみて、禪竹の胡麻章《UU*D》はアクセントを生かしたものとみた。喜勝は「世中に」で本文に異同がある。

18 「しほくみ車《UUUSDUS》」禪竹

19 「塩汲くるま《SSSSDSS》」喜勝

「潮汲み車」は、「潮汲み」と「車」の複合語である。「潮汲み」は「潮二拍名詞三類＋「汲む」二拍動詞一類の複合語で、この語構成のものは「あしまき(足巻(虫名))」「名義』「いぬいき(犬行)」「名義』「かみなり(雷)」「和名』「くつひき(沓引・臥機)」「和名』名義』「ことあげ(言拵)」「神紀』乾私』「ことわり(理断)」「名義』神紀』人紀』丙私』「しほかれ(潮涸)」「袖中』「たちはき(帯刀)」「古今』「たままき(玉巻)」「人紀』「つなびき(綱引)」「顕拾』浄拾』「はなつみ(花摘)」「古今』「またぶり(樫)」「和名』名義』「もとゆひ(元結)」「和名』「ものいひ(物言)」「顕拾』「やまごえ(山越)」「古今』袖中』顕後』「ゆみはり(弓張)」「和名』名義』「わきあけ(腋明)」「和名』名義』などアクセント体系変化前にLLLHの例がある。「車」は三拍一類であり、LLLH+HHHの語構成のアクセント例はみられないが、アクセント体系変化前のLLLHHLHからの変化とすれば、HHLLLとなる。禪竹の胡麻章は《UUUSDUS》で、HHLLLを反映する。喜勝は《SSSDSS》でHHHLLL

を反映しており、これも室町アクセントなのであろう。

20 「草の露」《UUUS》 禪竹

21 「草の露」《UUUS》 喜勝

「草の露」は「草」二拍名詞三類＋の＋「露」二拍名詞五類でアクセント体系変化前にはLLLLLが推定され、LLLLL∨HHHLと変化したとすれば、禪竹の胡麻《UUUS》と一致する。喜勝の胡麻章は五類「露」LFのアクセントが生かされた《SU》である。

22 「よりも」《UUU》 禪竹

23 「よりも」《SSS》 喜勝

「寄り藻」は「寄る」二拍動詞一類＋「藻」一拍名詞二類である。これと同じ語構成の「かるも（刈藻）」『古今』にHHHの例がある。禪竹の胡麻章は《UUU》でこれに一致する。喜勝は《SSS》でHHHを反映するとみてよい。

24 「すてくさ」《SUUU》 禪竹

25 「捨草」《SSSU》 喜勝

「捨て草」は「捨てる」二三拍動詞一類＋「草」二拍名詞三類の複合語で、同じ語構成で後部成分に「草」を持つ例、「うきくさ（浮草）」『和名 謡曲 大観・京ア』HHHH・『和名 医心 古今・平節』HHHL、「あみくさ（笑草）」『和名』HHHH・『和名 医心 名義』HHHLである。禪竹の胡麻章《SUUU》は語頭が低いがHHHHを反映するとできる。

26 「こひ草の」《右××DUU》《左UD×××》 禪竹

27 「恋草の」《SDDDS》 喜勝

「恋草」は「恋」二拍名詞三類＋「草」二拍名詞三類の語構成であるが、この構成の複合語はアクセント体系変化前にLLLLLで、体系変化によりHHHLとなる例が多い。しかし、「草」を下部成分に持つ語については「つきくさ（月草・鴨頭草）」「ももくさ（百草）」「やまくさ（狼毒（植物名））」などLLLLからHHLLへの変化を経ると考えられ、「恋草」もアクセント体系変化後にHHLLになったと推定される。

禪竹の胡麻章「こひ」の左に《UD》「草」の右に《DU》の胡麻《UDDU》は「恋」「草」それぞれのアクセントを反映するようにも見えるが、最初の下降が全体のアクセント型HHLLを反映したものと考えてよからう。また、喜勝の胡麻章は《SDDD》であることも考え合わせ、禪竹の胡麻章はHHLLのアクセントを反映するものと推定する。

28 「なれ衣の」《UUUUU》 禪竹

29 「なれ衣の」《SSSSS》 喜勝

「馴れ衣」は二三拍動詞二類「馴れ」＋「衣」三拍名詞一類の複合語で、同様の語構成の「立ちところ」には『名義』LLLLLで、体系変化後の例『平節』HHLLLがある。禪竹の胡麻章《UUUUU》は最初の下降がアクセント核で、HHLLLを反映する。喜勝の胡麻章《SSSSD》は体系変化前にLLLLLで、HHHLに変化したアクセントによると推定できる。

30 「すまのうら」《UUUF》 禪竹

31 「須磨の浦」《UDSSS》 喜勝

「須磨の浦」については、「須磨」が『古今・平節』にHLとある。アクセント変化前からHLであり、「浦」が三類なので、「須磨の浦」はHHLLで喜勝の胡麻《UDSSS》に近い。しかし、『大観』に「須磨の」H

HHの例があるので、「須磨の浦」HHHHLもあつたと考えられ、こちらは禅竹の胡麻章《UUUF》に合致する。

なお、「三年はここに須磨の浦」は「住ま」と「須磨」の掛詞であるが、一般には上から続く掛ける語ではなく、掛けられる下へ続く語の表記とアクセントが表出する。「住む」は二拍二類動詞でLHのアクセントであり、掛けられる「須磨」のアクセントで謡われていることがわかる。

32 「いやましの《UUUU》」禅竹

33 「いやましの《DSSSS》」喜勝

「いやましの」は、「いや」「人紀・古今・大観」HHで、「増し」が一類動詞の連用形なので、HHHLが推定できるが、後接が「の」であるため、現代京都アクセントと同様にHHHHHになったと考えられ、禅竹の胡麻章と合致する。喜勝の胡麻章《DSSSS》はHHHHHを語頭低下にしたものか。

34 「おもひ草《UUUD*》」禅竹

35 「おもひ草《SSDU*》」喜勝

「思ひ草」は、「思ひ」が二類動詞＋「草」二拍名詞三類の語構成は、アクセント体系変化前にLLLLLが多く、LLLLLHも見られる。体系変化後にはHHHHLかHHHLLになる。しかし、「草」を後部成分素に持つ複合語については、HHHHL、LHHHL、LLLLHのような後ろから二拍目に下がり目がくる型が多く、低く始まる語には「いたちぐさ（連翹・鼬草（植物名）・えやみぐさ（龍胆）（植物名）」「おきなぐさ（翁草）・くろめくさ（白薇（植物名）・たむけくさ（手向草）・つきねくさ（及巳（植物名）・ふかみぐさ（牡丹）・まとりぐさ（苦参（植物名）・まひりぐさ（苦草（植物名））」などがある。このLLLLLからの変化であれば、HHL

LLのアクセントと考えられる。禅竹《UUUD*》、喜勝《SSDU*》の胡麻章も推定したHHLLLに一致する。

36 「葉すゑに《UUUD》」禅竹

37 「葉すゑに《SDSD》」喜勝

「葉末」は、一拍名詞二類＋二拍名詞一類の複合語である。この語構成は「はごも（葉菰）」「顕散」、「やさき（矢先）」「和名 名義 謡曲 平節 京ア」、「やはす（矢筈）」「和名 名義」などアクセント体系変化前からHHHである。禅竹の胡麻章「葉すゑに《UUUD》」は助詞「に」が低くつぐが、名詞のアクセントには一致する。

38 「かり衣《DUUF》」禅竹

39 「かり衣《DDDDD》」喜勝

「かりごろも（狩衣）」は「古今・袖中」に〈平平×××〉の例がある。「狩」は『巫私・浄拾』では二類動詞と同様のLFが推定でき、「衣」が三拍名詞一類でHHHである。後部成分素が三拍一類でLLで始まる五拍名詞には、アクセント体系変化前に安定型のLLLLLの例が「あしがなへ（足鼎）」「和名 名義 浄拾」、「おほなつめ（大槩）」「医心」、「かはごろも（皮衣・裘）」「和名 名義 浄拾」、「からあふひ（唐葵）」「医心」、「はなざかり（花盛）」「古今・浄拾」、「はひまゆみ（杜仲（植物名））」「和名 医心 名義」、「ひきざくら（蕪夷・低桜（植物名））」「和名 医心 名義 袖中」、「ひとさかり（一盛）」「古今」、「みみぐさり（耳鎖）」「和名 名義」、「やまあざみ（山薊・大薊（植物名））」「和名」などと多く、特に後部が「衣」の「かはごろも（皮衣・裘）」もあり、「狩衣」もLLLLLからHHLLLと変化をしたものと推定できる。

禅竹の胡麻章は《DUUF》でHHHLLの語頭が下がった例であろう。

「三―二」胡麻章が新旧のアクセントを反映するもの

40 「おなし世に《UDUSU》」 禪竹

41 「おなし世に《DDSSU》」 喜勝

「おなし世に」については前稿でも取り上げたが、説明を加えておく^(五)。

禪竹自筆本の「おなし世に」《UUUUU》を《UDUSU》に変更をしていて、八左衛門本はそれを写す。「同じ」は形容詞であれば、二類相当でHLLのアクセントであるが、「おなじ世」では連体詞で『平節・大観』にHHHの例がある。ここは連体詞としての《UUU》から形容詞二類のHLLを反映する《UDU》に施譜を改めたもので、新しいアクセントを古いものに直したと解釈する。喜勝のおなし世に《DDSSU》は訂正後の禪竹に同じ譜である。

また、「世」は一類だが、現代京都は上昇調にかわる。「世に」は新しいアクセントが反映している可能性があるのかもしれない。

42 「よしなしと《UDFU》」 禪竹

43 「よしなしと《DDSDS》」 喜勝

「よしなし」も前稿で取り上げたが、禪竹自筆本は「よしなし」《DDDF》から《UDF》に変更を行ったとみられる。「よしなし」は『名義』にHLLF、『平節』にHHLLの例があり、訂正後の胡麻章はHHLLを反映していたとみられる。しかし、喜勝本は《DDSDU》の胡麻章が施されている。「よしあし」のアクセントに影響を受けたか、あるいは「由」のアクセントが現代京都では高起式から低起式のLHに変わることと関係があるのか。

「三―三」アクセントと胡麻章が一致しないもの

44 「出しほを《DDUU》」 禪竹

45 「出しほ、《DDSS》」 喜勝

「出潮」は、「づ」は二類動詞と同じ変化をし、「潮」が三類であり、アクセント体系変化前にはLLLが推定され、アクセント変化後はHHLが推定される。同様のアクセント例としては、「獲物」「見物」があり、『名義』ではLL×で、現代京都はそれぞれ高起式のHLL、HHHで、「出潮」は現代京都HHHである。禪竹《DDU》、喜勝《DDSS》の胡麻章で、「出潮」のアクセントではなく、低起式「でる」のアクセントを生かした節なのであろう。

46 「すかた《右S×U》《左DUS》」 禪竹

47 「すかた《DUS》」 喜勝

「姿」は五類で室町時代HLLのアクセントであり、禪竹は左に胡麻章をつけてあるが、この胡麻は《UDU》であり、HLLを反映する。しかし、右の胡麻章は《S×U》でアクセントには合わない。また、喜勝の胡麻章も《DUS》でアクセントには合わない。禪竹の右の胡麻章、喜勝の胡麻章は同じ高低を示しており、HLLのアクセントが《UDD》から語頭の高が一拍後ろにずれた施譜になったのであろう。これは旋律の要請によるもので、正確にアクセントを反映させるために禪竹は左に胡麻章を差しなおしたのではないか。

48 「しのひ車を《DUU*U*》」 禪竹

49 「しのひ車を《DSU*D*》」 喜勝

「忍び車」は「忍ぶ」三拍動詞一類か+「車」三拍名詞一類の複合語で、HHHHHHが推定される。禪竹、喜勝も語頭が低く、両胡麻ともアクセントを反映していないとみられる。これも語頭が下がった例である。

50 「ゆふしての《FUUU》」 禪竹

51「ゆふしての《DDDDD》」 喜勝

「木綿四手」は「木綿」二拍名詞一類相当＋二拍動詞「しづ（垂）」の連用形だが、名詞化した「しで」「袖中」L Lの例があり、二拍名詞三類と同様である。この語構成は「すそつけ（裾付）」「名義」H H H H・「和名」H H L、「にはたち（庭立）」「袖中」H H H H・「みづあひ（水合）」「名義」H H H H・H H X X・「みづかき（蹠・水掻）」「和名・名義」H H H H・「和名・字鏡・京ア」H H H L・「みづつき（水付）」「和名・名義」・「平節」H H H Lである。

禅竹の《F U U》はH L L Lが推定され、室町時代のアクセントに合わない。喜勝の《D D D D D》は平らなH H H H Hを反映するか。

四 おわりに

金春禅竹の『五音三曲集』所載の「松風」について、アクセント資料に用例のない語を中心に、室町時代の京都アクセントの推定方法について説明を行った。金春禅竹の胡麻章と、金春喜勝の胡麻章とも比較したが、ともにアクセントをかなり生かした節付けである。もちろんアクセントから外れる場合もあるが、現代の謡とは異なり、同時代のアクセントで謡われていたことが看取できる。

【注】

- (一) 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊編『早稲田語類』「金田一語類」対象資料『アクセント史資料研究会 一九九八年
(二) 謡の旋律とアクセントとの関係については、「謡曲における訛りとアクセント」『中近世声調史の研究』笠間書院 二〇〇〇年をご参照いただきたい。

(三) 『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』二五九ページ。

(四) 注3三三七ページ

(五) 坂本清恵「金春禅竹の胡麻章―施譜法とアクセント反映度―」『論集』X 二〇一五年

国文学研究資料館蔵 金春禅竹自筆本『五音三曲集』http://base1.nijl.ac.jp/view/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=099-0081
法政大学野上記念能楽研究所蔵 毛利家旧蔵金春喜勝筆謡本「松風」
http://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken_material/htmls/index/pages/catel.html

なお、国文学研究資料館、野上記念法政大学能楽研究所には、影印掲載許可をいただきここに感謝申し上げます。

名詞	1拍	1類	柄・蚊・子・瀬・血・戸	H(H)	H(H)	H(H)	L(H)	L(H)
		2類	名・葉・日・藻	F(L)	F(L)	F(L)・H(L)		
		3類	絵・木・酢・手・荷・根・火・輪	R(H)	R(H)	R(H)・L(H)	H(L)	H(L)
	2拍	1類	飴・梅・顔・柿・風・里・末・庭・鼻	HH(H)	HH(H)	HH(H)	LH(H)	LH(H)
		2類	歌・紙・川・橋・冬・村	HL(L)	HL(L)	HL(L)	LH(L)	LH(L)
		3類	足・浦・髪・草・潮・花・腹・山・夢・海士×	LL(L)				
		4類	糸・海・肩・錐・空・中・箸・船	LH(H)	LH(H)	LH・LL(H)	HL(L)	HL(L)
		5類	秋・雨・琴・猿・露・鶴・春・窓	LF(L)	LF(L)	LF・LH(L)		
	3拍	2類	小豆・女・毛抜き・娘	HHL(L)	HHL(L)	HHL・HLL	LHH(L)	LHH(L)
		4類	頭・男・鏡・刀・宝・光	LLL(L)				
		3類	鮑・二十歳・山葵	HLL(L)	HLL(L)	HLL(L)	LHL(L)	LHL(L)
		5類	朝日・命・心(×)・姿・涙・錦・枕	LLH(H)				
		7類	蚕・兜・便・椿・病	LHL(L)	LHL(L)	LHL(L)	HLL(L)	HLL(L)
		6類	鰻・狐・雀・鼠・雲雀	LHH(H)	LHH(H)	LLH(H)	HLL(L)	HLL(L)
		1類	霞・形・車・煙・氷・衣・魚・隣・柳	HHH(H)	HHH(H)	HHH(H)	LHH(H)	LHH(H)
動詞	2拍	1類	買う・欠く・鳴る・振る・行く	HH	HH	HH	LH	LH
			着る・為る・似る・寝る					
		2類	飼う・書く・住む・成る・降る	LH	LH	LH	HL	HL
	3拍	1類	上がる・歌う・踊る・通う・進む・運ぶ・拾う	HHH	HHH	HHH	LHH	LHH
			上げる・植える・消える・捨てる・染める					
		2類	余る・祈る・移す・落とす・思う・作る・頼む	LLH	HLL		LHL	LHL
			生きる・落ちる・過ぎる・慣れる・延びる			LLH		
	3類		歩く・隠す	LHH	LHH			
形容詞	3拍	1類	赤い・甘い・薄い・軽い・重い	HHF	HHL		LHH	LHH
		2類	痛い・高い・悪い・細い・青い	LLF	HLL	HLL	LHL	LHL

Assumption regarding Accent in the Noh Chant “Matsukaze” in the Muromachi Era

SAKAMOTO Kiyoe

It is said that the traditional music of Japan reflects the accent in Japanese which is realized by pitch. Research until now has shown that the scores of such genres of music as *shomyo* (Buddhist sutra music), *heikyoku* (chanting of the *Tale of Heike* played to the accompaniment of *heike biwa*), and *gidayubushi* (narrative accompanied by a *shamisen* in bunraku puppet theater) reflect the accent used at the time of their composition.

The purpose of the present paper is to show, using the noh chant “Matsukaze” as an example, how noh chants of the Muromachi era are used to investigate the accent system of Kyoto in the same period. The paper will also explain how accent is assumed for words lacking descriptive evidence by extrapolating from their structure and their accentual classes. By comparing the *goma* marks for “Matsukaze” in *Go-on san-gyoku shu*, a text on noh chants by KOMPARU Zenchiku, and those by KOMPARU Yoshikatsu, this paper attempts to clarify how *goma* marks found in books of noh chants for the Muromachi era reflect the accent of the time.